

米国の教育制度：日本との比較論

A Study of the American Educational System:
A Comparison with the Japanese System

尊田 望・小野 一臣

(Nozomu Sonda & Kazuomi Ono)

山口短期大学学術研究会研究紀要

第 15 号 別 刷

1993.12

米国の教育制度：日本との比較論

A Study of the American Educational System: A Comparison with the Japanese System

尊田 望・小野 一臣

(Nozomu Sonda & Kazuomi Ono)

概要

現在、日本の教育は、個性と自由を学習から奪い、創造性を失っているなどと鋭く批判されている。米国の教育は、その逆として、よくひきあいに出来る。日本の教育の長所は、礼儀、秩序、規律を重んじるため、全体の統制が取りやすく秩序を維持し、犯罪や風紀の乱れなどを防ぐ効果がある半面、個人の自主性、自由、創造性を育むことができない状態である。他方、米国は、自由でのびのびとした、個性と独立心を養うが、個人同士のつながりがなく、自己主張をし、個人差が激しくなると言う不利点がある。双方の国が、お互いの長所から学び、短所を矯正することを援助できるが、双方とも、人間の本质を見極めた、より深遠な、精神的ビジョンや価値観が欠け、唯物的な教育観に左右されている。教育改革の改善は、「人間とは何者か」という、根本的な哲学的問題に答えることから再スタートしなければならぬ。

Abstract

In order to improve Japanese education, comparisons have been made between Japanese and American education. We have found that Japanese education has contributed to maintenance of order, morality and collective integrity, however, it been criticized as being rigid, uncreative and robbing learners' individuality. American education has been regarded as creative, free and practical, but has not been able to deal effectively with the needs arising from great diversity of the learners. Both nations can teach each other its own strengths and help overcome each other's shortcomings, for the two are very contrasting. However, the underlying, common problem is the lack of a deep insight into human nature and human needs in today's rapidly changing society. This must become the starting point for educational reform for both communities.

1. 問題

現在、日本の教育は、個性と自由を学習から奪い、創造性を失っているなどと鋭く批判されている。それに反して、米国の教育は、自由でのびのびとし、学習者が率先して参加し、実用的な知識と技能を身につけている、と見なされ、よくひきあいに出来る。今回、児童教育者を養成する者として、日米の教育の長所・短所を明確に比較することにより、日本教育の改善にいくらかの示唆をしてみることができた。対照的なふたつのものを比較することは、お互いのことをより深く理解し、相手と自己の開発につながるからである。

2. 米国の教育制度¹⁾

1) 日本では、文部省により6-3-3制で統一されているが、米国では、教育制度の全国的統一はなく、詳細は、州により、また、私立と公立で異なっている。6-3-3制は、最もよく見られる制度のひとつであるが、これと同じく、8-4制も多く見られる。また、6-6制や4-4-4制なども見られる。学習者の身体的・心理的・知的発達状況などを考慮しての分類の違いなのである。したがって、日本のように「中学2年生」、「高校3年生」といった呼び方はせず、1年生から12年生まで数字で呼ぶのが普通である(例：中

学2年生＝8年生 [the eighth grader], 高校3年生＝12年生 [the twelfth grader].

また、義務教育の期間も、州によって異なっており、ある州は、9年生まで、ある州は12年生までと幅がある。

しかし、大学以降は、大学1年、2年、3年、4年と呼び方が変わる。大学は、2年制大学、4年制大学、大学院、専門学校などに分かれる。短大は、私立の junior college と、公立の community college に分類できる。前者では、4年制大学への編入者が多く、後者は、就職向けである。特に後者は、その地域によって成り立っており、様々な年齢層や職業の人々が、異なる目的のために集まった学生によって構成される。

4年制大学には3種類あり、ひとつは、学士課程のみを有して、一般教養課程を重視する大学で、liberal arts college と呼ばれる。二つ目は、総合大学で、修士課程までを有する中規模の大学である。三番目は、博士課程まで有する大規模で有名な大学である。

それでは次に、米国教育の根底に流れる哲学的思想と理念について調べてみる。

3. 米国教育の背景と現状²

A. 思想的基盤

1) 哲学的基盤

a. 観念論／唯心論／理想主義 (Idealism)

永動不変のアイデアの世界が存在し、生滅変転の現象界はその反映である。

b. 実在論 (Realism)

意識や主観を越えた独立の実在を認める立場。認識において主観に対する客観の独立を認め、このような客観をとらえることにおいて認識が成立すると主張する。

c. 実用主義 (Pragmatism)

経験の改造と拡大が教育の本質であり、行為を離れた思考はなく、思考は行為の一部である。教育は、人類の文化遺産を能率的に覚え込むという受動的な者ではなく、生活経験を能動的、不断に改造していく営みでなければならぬ。学校はこのような経験改造の場であり、児童の発達段階に応じた、操作可能な、理想化された生きた小社会でなければならぬ。生活体験に応じて、興味と自発性が学習を構成する。活発な作業の中で発展的に秩序づけられていく実際的・実験的・経験的・創造的・操作できないものである。行動することによって学ぶのである。操作を中心として社会生活への適応・創造・発展と教育が重ね合わされる。

プラグマチズムは、旧来の教育の画一的な形式主義・

権威主義を批判した。

しかし、アメリカは、伝統という基盤がなく、楽天的な人生観社会観を背景とする直接経験に密着して成り立たしたという点が、批判されている。つまり、具体的生活経験と客観的文化との断絶を処理できない、教師の指導性の限界が見失われがち、などの批判である。

d. 実存主義 (Existentialism)

真理は客観的・合理的ではなく、個別的・主体的である。「主体性が真理であり、主体性が現実である」とする。

2) 教育理論的基盤

a. 永久主義 (Perennialism)

知識の原則は不変であるとし、人間の存在も根本的に不変であるとする。故に、教育は、その不変の部分を対象として施されるべきである。具体的には、数学・論理・偉大な書物 (名作・名著) の読書・教義、文法・レトリック (語法) ・ディスカッションによる理性の開発など。

b. 本質主義 (Essentialism)

教育には、人が有するべき中核的な情報と技能がある。中核的情報・勤勉・知的規律・教師中心の教授法を特徴とする。「読む・反復・復習」(Read-Rehearse-Review: 3R) を奨励。具体的な内容は、時代によって変遷するが、本質的には、不変である。

c. 行動主義 (Behaviorism)

客観的に観察できる行動のみを取り扱い、行動は刺激の関数として表せるとする。極端な環境論的立場を取る。

d. 進歩主義 (Progressivism)

伝統的な教育の教科書中心の教授を批判し、児童の生活から学習を構成しようとする。生徒の自由を保証し、彼らの興味から学習内容・形態・方法を導きだし、自発的で個性的な学習活動を教室だけでなく、実際の社会で実地に展開することにより所与の文化財の記憶ではなく、創造する人間をめざしている。人間の陶冶性に対する信頼と教育の可能根拠を基本的に児童自身の中に見いだそうとする姿勢がある。社会の安定期には順調であるが、深刻な破局を迎えているとき——1929の世界恐慌時など——には、弱点を見せる。日本では、大正末に受け入れられ、戦後特に影響を及ぼしたが、批判は絶えない。

e. 改造主義 (Reconstructionism)

教育は基本的に人類文化からその存在理由や内容を与えられる。したがって社会改造の手段としてとらえられる。人類の目標すなわち世界文明の確立が教育の究極的関心である。非合理的な根源的自我に宗教的質への探求を求めらる。

f. ヒューマニズム (人間主義) (Humanism)
人間性を尊重し、これを束縛し、抑圧するものから人間の解放をめざす。教育は、自由で自己実現をする人間を開発するプロセスである。生徒の感情を中心とするべきである。教育は、偉大な考えや世界や人類から始まるのではなく、個人自身から始まる。

3) まとめ

これらの教育哲学や理念に基づいた米国の教育の二大原則とは、「科学主義に基づいた専門職主義 - 中間階級 - 官僚制」と「個人主義 (個性重視, 自由人, 独立した市民, 叩き上げの人間 (self-made man), 自己信頼のライフスタイル, 「心の習慣」) である。これは、「崇高な存在としての子供, 批判的思考を通しての自己表現」, 「生徒は自由でのびのびと各自の意見を表現でき, 多様な価値や見解を受け入れられる寛容な教育」といった評価に表される⁴。

これに対して, 日本の教育は, 神道, 仏教, 儒教, 道教など, 主に自己規制・秩序・礼・儀など, 全体の秩序や和を重視する価値体系に基づいて発達した。

B. 米教育制度の歴史⁴

1) 植民地時代

17世紀のアメリカの学校教育は, 主に宗教的教育, 特にバイブルを読むということを目的として, 教会が, 男子を対象として行っていた。そして, 1637年には早くもハーヴァード・カレッジが設立され, (宗教的) 教養を身につけるための大学として発足した。この後, ウィリアム・アンド・メアリー・カレッジ (1693), イェール (1701), プリンストン, コロンビア, ブラウンなどが続く。いずれも, 宗教的教育を目的とした教養課程大学であった。これらの大学は後に, ドイツなど欧州の大学の影響を受けて改革されていく。

2) 19~20世紀

その後, 民主主義の基礎づくりとして公立・私立学校が建てられていく。20世紀初頭には, 世界で最も普及した教育制度を有していたと言われる。しかし, いわゆる旧ソ連による初の人工衛星の打ち上げにより意識改革を迫られ (「スプートニク・ショック」), 国語教育, 外国語教育, 数学・科学教育を充実させていく。大学では, 実利的な理科系の学科が増設されていた。

3) 研究大学・大学院の登場

このように, 大学は, 教養だけでなく, 専門知識や技術を研究していく必要性に迫られ, ジョンス・ホプキンスなどの「研究大学」が生まれていった。さらに高度な知識と技術を研究開発し, また伝達していくために, 「大学院」も作られていった。

4) 生涯教育・通信教育制度の出現⁵

さらに, 激しく変動する社会の要求, 頻繁に動き回る米国社会のために, 最近, 「生涯教育」や「通信教育」の制度が発達してきている。

「生涯教育」は, 必ずしも, 余生を教養学習のために過ごしたいという高齢者のみを対象にするのではなく, 40代・50代になって転職を考えたり, さらに高い学位を取得したい人のために, 働きながら, あるいは年齢が通常の学生より上であっても学習しやすいように配慮されたシステムである。

また, 「通信教育」は, 働きながらあるいは主婦や育児をしながら勉強したり, あちこちに転勤・引越したりしながら勉強することをより容易にするために実践されている。また, 年齢が上になり, 通常の大学の教室に戻って学習することが困難な人や, あるいはその必要のない人の経験や業績や仕事や独学の成果を評価して単位を授与する制度も出てきている。

5. 米国の教育の実践と実状:

三つの事例を通して

では, 上記のような哲学, 制度に応じて実践されている米国の教育を, 幼稚園・小学校と大学を例に上げて調査してみる。

A. 州立大学⁶

米国の教育は, 州によってかなり内容が異なるため, 一概に一般化しにくいのが, 大学教育は, 全般的に共通する点が多い。特に, 共通点が多いと思われる州立大学などを例に考察してみる。

米国の州立大学は, 大体, 学生数一万人から四, 五万人のマンモス校が多い。その仕組みについて, 主な特徴を下記に挙げてみる。

1) 「飢えている人にパンの焼き方を教える教育」

米国では, プラグマチズムに習って, 知識そのものの習得よりも, 知識をいかに使うか, に焦点を当てて教育する。教師は, 「知識」を受け売りするのではなく, 学習者がいかにその知識を役立てていくかを導く役割を担う。

実践力を付ける意味では, 非常に効果を発揮するが, 基礎的な知識に乏しくなる恐れもある。

2) 短期集中型

米国の大学では, 2学期制または3学期制を設けている。2学期制は, 1学期 (秋学期) が8月下旬または9月に始まり, 12月中旬に終わる。2学期 (春学期) は1月中旬に始まり, 5月中旬に終わる。さらに, 夏の6~7月には夏学期 (summer school) があり,

通常の学期の3分の2程度の単位履修ができる。3学期制では、9～12、1～3、4～6月のように3カ月程度で区切っている。

いずれにせよ、ひとつのコース(科目)を履修するに、通常、一学期で終了させるのが、米国の大学である。つまり、3カ月から4カ月の間に集中的に授業を行い、マスターさせるのである。さらに、週に60分授業を3コマないしは90分授業を2コマ設けるのが普通で、ここにも、短期集中型の傾向が表れている。

これは、教官の授業計画を立て易くし、かつ、受講者の学習を容易にすると言った効果を出す。日本では、週90分授業1コマ制が多く、しかも1年間かけて終了させる「通年制」もある。後者では、授業密度が薄くなってしまふ。

8) シラバスによるコース内容の明確化

各コースには、必ずシラバスがあり、授業の情報が詳細に提供されている。これを読めば、履修者は、何を期待されているか、何をすれば単位が取れるか、分るようになっていく。当然、各コースや教官により多少の差異はあるが、基本的な内容は下記の通りで、大体のコースにおいて共通している。(資料1参照)

- a. 基本情報：コース名、授業実施の曜日、時間帯、講義棟名、教室名など。
- b. 担当教官に関する情報：氏名、研究室(オフィスの)位置、電話番号、相談に対応する時間帯。
- c. 履修条件：コースを履修するために前もって履修しておくべきコースや資格など。
- d. 授業のねらい：コースの目的。
- e. 毎回のテーマ：各授業でカバーするトピック、それに相当するテキストの頁番号など。
- f. 成績評価法：テスト、レポート、討議参加などの項目及びその配分率など。
- g. 参考文献及び入手法：必須教科書以外の文献のリスト。

4) 学生による教育評価

一学期のコースが終了すると、学生は、教官や授業に関して、評価させられる。内容としては、次のようなものが挙げられる。評価は通常、リカート法による5段階から成っている(例：1=全く当てはまらない、2=余り当てはまらない、3=中間くらい、4=良く当てはまる、5=非常に良く当てはまる)。「授業の目的が明確であったか」「教材が有益であったか」「授業の進行ペースが妥当であったか」「与えられたアサインメントは、コースの目的と一致していたか」「コースで要求された学習量は、単位数に相当するものであったか」「質問をしやすい雰囲気であったか」「教師の学生評価は公平であったか」「授業が刺激的であったか

か」「学生と積極的なコミュニケーションが図られたか」「この授業を他の学生にも勧められるか」「この授業をどれくらい評価するか」「この教官をどれくらいに評価するか」などである。

評価はマークシート式で記入され、結果はコンピュータではじき出される。このデータは、大学による教官の人事評価につながり、教官の昇格や給与にも影響する。

学生の評価は、必ずしも正確あるいは正当でないかも知れないが、前述の通り、質問の内容は、教育心理学的・教育テクノロジー的な見地からしてもかなり客観的である。つまり、少なくとも、学生による自由回答(response to open-ended questions)よりも的確である。あくまで、学生による評価であり、大学側による教官の評価は、研究業績などで別に存在する。いずれにせよ、学生による評価は大きなウエイトを占めるため、教官は、良い授業の創造のために多大な努力を払う。そのためにも、教官は、シラバスの内容を徹底するのである。

また、大学内では、授業を改善するための様々なプログラムが存在し、教官の支援をしている。

5) 大学による研究評価

米国の大学、特に総合大学では、教官による研究論文の発表が重視される。一流の研究論文誌に発表することは、一流の大学の教授の必須条件である。米国では、“Publish, or perish”(「論文発表せよ、さもなければ滅びよ」という一種の「格言」があるほど、研究業績が重視される。このため、新しい文献を最も早く入手した者の論文が採用される可能性が高くなり、単に文献入手競争に終始するケースも多くなってきている。そのような極端な傾向は好ましくないが、発表場所がどこであれ、ある程度以上の研究業績を残していくことは、大学教員としては、当然の義務である。

ただし、「教育」と「研究」の両立は米国でも至難な技とされる。そのため、研究に秀でる教官は4年制大学に、教育を好む教官は2年制大学や教養課程大学に片寄る傾向はある。しかし、日本に比べれば、両方をこなしていきこうとする積極的な教官が多く見られるようである。

6) 行政活動・学外活動の評価

前述の通り、総合大学では教官の研究活動が、そして2年制大学や教養課程大学では教育活動がより重視されるが、さらに、学内の行政活動や、学外での活動、特に地域奉仕やボランティア活動なども重視されるケースもある。特に、コミュニティ・カレッジでは、地域奉仕や学外での地域内の組織や委員会に属することは義務づけられており、教員の昇格や終身在職権などを

左右する (Smithwick)。なぜなら、コミュニケーション・カレッジの機能そのものが、地域率仕にあるからである。その大学の機能に合わせて、教員の評価法が異なっているのである。しかし、日本ではまだ、この種の短期大学はほとんど存在していない。日本の短期大学は、女子の教養、技術専門学校、4年制大学に行けない学生の行き場、と言った種類に留まっている。

7) 教官の資格

日本では、一応、大学教員になるために大学院での教育を受けておくという条件はあるものの、実際には、それに準ずる資格（つまり修士または博士と同等の能力や業績のあると認められる者）により採用されている教員も少なくない。しかし、米国では、修士・博士の学位の取得は、かなり厳格に守られているようである。

8) クラスの規模

クラスのサイズは、科目やレベルなどによって多様に異なる。通常、1年生用の「入門」クラスは、100人、200人あるいはそれ以上の大教室で実施することが多い。レベルが上になり、専門化が進んでくれば、通常、20~30人程度の小人数に収まる。語学などになれば、なるだけ小人数になるよう工夫される。

9) 課外活動

米国の大学にも、課外活動としてクラブは存在するが、日本のそれほどに結びつきは強くない。大学では、あくまで学業が中心であり、クラブにいそしむ学生は、奨学金をもらってプレーするスポーツ選手やその他の特待生以外には、余り見あたらないようである。

ただし、親睦団体であり半分「寮」的な性格を持つフラタニティ（男子用）やソローリテイ（女子用）などの組織は存在する。しかし、「遊び」は週末などに限られ、学生は学業に忙しい。

10) 典型的授業風景

それではここで、米国の大学の典型的な授業風景を探ってみる。

a. 教官

アメリカという文化そのものがそうであるが、教員は全般的に、余り気取らない。服装もそうである。特に、大学になると、教員は各自思い思いの服装で授業にやってくる。まさくで親しみやすいこと、これが彼らのモットーのようである。夏ともなれば、Tシャツに短パンで教授が登場しても、何等不自然でもない。教員達は、授業の途中で勝負するのである。

b. 授業開始

授業ではまず、前回終わった箇所について思い起こさせたり、試験やアサインメントやその他のアウンスを行ったりする。しかし、それと同時にあるいはそ

れ以前に、教官達は、緊張をほぐすために、ジョークを言ったりする。ある教員は、Reader's Digestから引用したり、新聞のcartoon（風刺漫画）から、あるいは独自のジョークを持ってくる者もいる。あるいは、前の日あるいはその日の報道から得られたニュースで、適当なものを選んでクラスに紹介したり、非常に簡単な話のやりとりをしたりする。いずれにせよ、授業は、単に機械的な情報で始めるのではなく、ユーモアやリラクゼーションを含めた活動から始めるのが彼らの信条なのである¹⁹⁾。

c. 講義

「講義」としての授業は、教官が情報を提供するという形式で行われる。もちろん学生による質問は通常、いつでも歓迎されるが、基本的には一方的な授業である。しかし、教官は、クラスの注意を引きつける。アイ・コンタクトを保ち、教壇を右へ左へと移動し、さらに教壇から降りてきて、最前列の学生等の前をさらに左右へ行き来する。

その間、学生らは、真剣に講義に耳を傾ける。ノートを取り、分からないことは質問する。居限りはまずない。私語も少ない。うるさい場合、教官が注意する前に、学生同士で注意する。

しかし、真剣な学生の態度に反して、学生らの姿勢や行儀は結構悪い方である。足を投げ出したり、隣の学生の椅子に足をかけたり、ジュースを飲みながらの受講も普通である。しかし、授業や他の学生を妨害しない限り、注意されることもないし、お互いに気にならないうようである。形よりも中身で勝負しようと言う精神なのであるろうか。

教授もまた、机の上に腰掛けたり、コーヒーを片手に講義する場合もある。

この講義の間、学生は自由に質問できるわけであるが、教官は、通常、どんな質問でも歓迎する。全く無関連な質問をするケースは余りない。また、教官の発言に反論がある場合も、歓迎される。それに対する解答により、説明している点がより明快になり、クラス全体が益を得るからである。もし講義に関連すること教官に答えられない質問である場合、教官は分からないことを認め、一定の期間以内に答を見つけてくることを約束することが期待される。質問すること、反論することは、失礼なことではなく、クラスへの貢献であるという考えなのである。

「講義」は根本的に一方的ではあるが、学生が真剣かつ熱心に参加できるのは、質問が自由にできるといふ雰囲気があるからである。また、授業が「講義」だけでなく、次に取り上げる「討論・ディスカッション」をも含むからである。

d. グループ討論・ディスカッション

「講義」は比較的多数の学生を相手に行うため、1週間あるいは1カ月に1回と言った頻度で、学生を小グループに分類してディスカッション・セッションを設ける。これらの小グループには、教授の助手が担当にあたる。この小グループでは、教授の講義の内容をさらに噛み砕いて説明したり、デモンストラーションを行ったり、質疑応答を行ったり、意見交換をしたりする。講義で一方的に聞いている内容について、今度は積極的に消化していくのである。

場合によっては、グループでプロジェクトを行ったりして、実践的な学習体験を積む。

このような小グループでの参加態度も、評価の大きな部分を占める。

e. 授業のまとめ

小グループに分け、助手による討論などを行った後は、再び主任教官が教壇に立って、まとめ役をす。ただし、このような小グループ分けは、必ずしも全てのクラスで実施されているわけではない。通常、教授や助教授が担当する大教室における「概論」コース（「経済学概論」、「心理学概論」など）で受講者が多数の場合、それも助手がいなければならない。これは、州立総合大学などの大規模大学では比較的広く実践されているようである。

f. 授業終了後・授業外相談時間

授業中にできなかった質問や個人的な相談は、授業後に行われる。学生達は、教官を捕まえては、質問責めにすることも多い。快く相談に乗ることが期待されているが、時間がない場合、教官のオフィスまで来るように指導される。通常、各教官は、office hour と言って学生の相談に乗る時間を設け、発表しなければならぬ。その時間帯は必ず、オフィスのいて、相談に来れば応対しなければならぬ。しかし逆に、その時間帯以外であれば、訪問しても応対してくれないこともある。研究や授業の準備で重荷を背負っている教官達には、明確な時間割が必要だからである。オフィスそのものは、比較的狭い。日本のように、「研究室制度」がなく、多数の学生達が教官の研究室に入って共同研究することもない。

g. アサインメント

アサインメント (assignment) とは、いわゆる宿題のことであるが、必ずしも教官がチェックするものではない。通常、次の授業に必要な文献や資料を読んでおくことを指す。このアサインメントをこなしたかどうかは、次の授業での発言度や発言内容で大体分かるからであり、また試験でもその効果が現れるからである。通常、ひとつの授業の前に読まれる文献

の量は、少なくとも10~20頁、多ければ100頁近くあるときもある。次の授業は大抵、翌々日であるため、かなり速く読まなければならない。このため、アメリカでは、speed reading (速読法) のセミナーもキャンパス内で行われている。

h. レポート

米国の大学では、term paper と呼ばれる、いわゆる「期末レポート」のようなものである。しかし、回数や時期は、教官によって異なる。多くの場合、学期の中間や4分の3程度こなしたあたりに提出を要求される。量は、約A4版の紙にダブルスペース (25~30行) で約20枚ほどである。日本語の原稿用紙で言えば、40枚前後であろうか。少なくはない。また、このレポートが成績評価の50%を占めるとい場合もある。レポート書きは、論理的な思考や分析力を訓練させ、また社会に出てからでも報告書や小論文を書くときに役立つ。

i. テスト

通常、テストは、1学期に数回実施される。大体3~4回くらいが平均のようである。つまり、月に1回くらいのペースでテストがあり、その月にカバーした内容に関する試験を行う。そして最後に期末テストとして全般的な試験があるのである。期末テストを、単に3回目または4回目の部分のテストとして行う場合も多い。こまめにあるため、試験勉強はしやすい。また、試験の前には復習セッションを設けてくれる。また、シラバスと同様、試験でカバーされる範囲や要点を明確にしてくれるため、真面目に勉強する学生にとっては、準備しやすく、また、効果も上がるのである。

j. 屋外授業

アメリカは自由をモットーとするだけあり、天気の良い春や夏の日には、屋外の芝生の上で授業することもしょなくない。屋外でできる授業内容の時は、形式にこだわらず、より快適でおおらかな方を選ぶのである。

B. ハワイ州カノエラニ小学校の事例”

1) 1982年設立。公立。

2) 時間：7:45、一限目開始。休憩時間は15分。

昼食時間は30分、昼休みは15分。下校時間は14:00 (ただし水曜日は13:15)。教員の勤務時間は7:45~14:45。事務局は7:30~16:00。

3) 給食：朝食が7:30-7:45の間に支給される。料金は、1食35セントで、減額したもの (20セント) やミルクのみ (25セント) という選択もある。

昼食は、10:00~12:00に支給され、1食が45セント、減量が20セント、ミルクのみは25セントである。ランチ代はローンでできるが、すぐに返却することが要求されている。

4) 交通安全

スクール・バスを利用することもできるが、自転車での通学も可能。

5) 授業

男女共学。基本として一人のホームルームにより授業が実施される。時折、ティーム・ティーチングもある。平均的教科は、言語、算数、理科、社会、保健衛生、音楽、図画工作、体育であるが、ホームルーム教員との協議により、児童の特別なニーズに合わせた特定のプログラムも準備できる。これは、保護者の提案により開始できる。

6) その他の活動

スピーチ・フェスティバル、書籍展示、レインボークラフ（レインボーは、同小学校の愛称である）、書籍販売、月間レインボー賞の授賞式、メーデーなど。これらの行事は、授業で習得した技能を応用する実用的な場所であり、一定範囲の学習が終了した時点を記念するものであり、指導力を養成し、児童活動の業績を認識すると言った機能がある。

7) 宿題

宿題は、授業や教員の目標、あるいは各児童の特定のニーズに応じて与えられる。授業で残した学習範囲、自主的なプロジェクトや研究などが対象となる。保護者は、「学習に適した照明の下での学習の奨励」、「文具の供給」、「邪魔にならない時間と空間の提供」を奨励されている。

8) 社会見学

教科書や教室内の授業の補足として時折社会見学が実施される。通常、地域内のイベント行事を活用することが多い。保護者は前もって日時や費用について通知を受ける。保護者は、社会見学旅行の承諾書を出しなければならない。また、見学に参加するためには、各児童とも、保険に加入していなければならない。

9) パーティ

毎年、「パンチ&クッキー」パーティが2回催される（12月及び6月）。各児童の誕生日パーティは、基本として、大規模では行わない。

10) 服装

効果的な学習に適した服装を奨励する。

11) 規律

児童は、明確な規則がある時、そして規則を破った時にはどのような結果が起きるかを知っていると安心する。保護者の協力も請われる。究極の目標は、児童が自己規制をすることである。規則に関する資料のコピーは事務局で入手できる。

12) 訪問者

保護者も含めて訪問者は、事務局を通すように要求

されている。授業の進行を妨げないため、また安全を確保するためである。

13) 保護者と教員の会議

四半期が終えた時点で、児童を一時早く下校させて、「保護者と教員の会議」が開かれる。

14) 通知表

一年に三度、「通知表」が保護者に渡され、各児童の成長、生活態度、学習態度などについて報告される。

15) 保護者便り

定期的に「保護者便り」が送付され、学校からの重要な情報が保護者に伝達される。

16) P. T. A.

同小学校では活発なP. T. A.活動が実施されている。入会は、年間随時歓迎されるが、特に、9月から10月の間に宣伝されている（9月が年度始め）。少額の年間会費と毎年実施される募金で集められた金額は、児童の活動や学内のプロジェクトに使われる。全保護者が活発な会員となることが奨励されている。

17) 保護者への提案事項

- ・所恃品には氏名を記入すること。
- ・大金を子供に持たせない。
- ・遅刻しないように子供を送り出す。
- ・出席を心がけさせ、休むときは受けなかった授業内容について教員に尋ねること。
- ・学校が送付した物について子供に確認する。
- ・学校での出来事を話し合う。保護者として関心を示す。
- ・健全な自尊心、他人の感情や権利に対する敬意を模範として示す。
- ・安全について毎日子供に話す。知らない人から物をもらわれないようにさせる。
- ・各児童がユニークなのであり、他の子供と自分の子供を比較しない。自分の子供の長所や才能を強調し、助けが必要な箇所には援助する。

18) ハワイ州教育庁について

- ・州内は、七つの校区に分かれているが、システムとしては統一されており、米国内では、州全体が統一されている点では唯一である。
- ・教育委員会のメンバーは選出され、教育方針を決め、監督者（superintendent、校長とは異なり、校長の上に立つ行政者）を通して統制する。各校区に、校区内の監督者がいる。さらに、各校区には、教育長及び校区監督者への助言者として任命された理事會（School Advisory Council）が存在する。
- ・教育長は、州議会から資金を受け取る。ハワイ州は他の州と異なり、学校運営のために、不動産税を使用しない。資金の大部分は所得税及び物品税による収入

—これは、州の一般基金を構成するが—により成り立っている。残りは、州の特別な基金や連邦政府からの助成金による

・ハワイの公立学校のカリキュラムは、
The Master Plan for Public Education および
The Foundation Program に基づいている。民主
的国家アメリカにおいて責任ある市民としての機能に
必要な知識・技能・態度を習得することが意図されて
いる。

The Foundation Program の目標には、以下のよ
うな点が挙げられている。

- 学習や人とのコミュニケーションに必要な基礎的技
能の養成。
- 肯定的な自己概念を開発すること。
- 意志決定・問題解決の技能を習得する。
- 自主的な学習態度を養う。
- 心身の健全を養う。
- 職業の準備を、個人的成長と開発に必要な一部分と
して追求すること。
- 自分と他人への責任を反映する哲学を開発すること。
- 独創性と美的感覚を養うこと。

C. ハワイ州ホノルル・コミュニティ・カレッジの 幼児センター¹²

1) 所在地：ハワイ州ホノルル市

2) 目的

- ・カレッジ内の幼稚園・保育園として機能
- ・カレッジやハワイ大学の児童教育の美習の場として
の機能

3) 園児

- ・乳児：3～18ヶ月。
- ・年少：18ヶ月～3歳まで
- ・年長：3歳～5歳まで。

ただし、カレッジ内の学生の生徒のみが受け入れら
れる。例外は、カレッジの教職員の子女のみである。

4) 費用

- ・学期ごとに支払う。

・一括払いまたは分割払い(4回まで)。

5) 層

- ・通常の学校の層と同様。

6) 時間

- ・月曜から木曜までは8:00 am～4:00 pm (年長
のみ7:00 am から)。

・金曜日は、12:30 pm まで。

・月曜から木曜は、4:00～9:00 pm の夜間も設け
ている。

・土曜日は、7:00 am～1:00 pm。

7) プログラム

・園児の身体的・知的・社会的・情緒的的局面全てを考
慮する。

・美術的活動、ブロック遊び、ストーリー・テリング、
ドラマ遊びなどを独創性を養う。

・本を園児に読んで聞かせ、各教材を用意し、お互い
のコミュニケーションを図ることで言語発達を図る。
・砂、水、粘土、ビー玉などで遊ばせ、安全性を確保
しつつ、運動機能を発達させる。

・食事、排泄、おしめ替え、休憩時間が規則正しく実
施される。

・優しくかつ厳しい態度で、幼児の表現力を養い、言
葉の学習や物の扱い方を教える。各家族の威厳、個
性、文化を尊重して教育する。

6. 考 察

A. 米国の教育について¹³

アメリカでは、高校までは比較的社会的教育が重視
され、クラブ活動や奉仕活動や社会的技術習得などに
力を入れている。そして大学の学部教育で一般教養や
いくらかの専門知識や技術を真剣に習得させる。大学
が正念場なのである。さらに、真に高レベルの知識や
技術を習得したい場合は、大学院に進まなければなら
ない。日本では、大学入学までが勝負とされる。それ
までは、高校3年間、長ければ中学や小学校からの6
年以上の受験勉強を強いられる。したがって、大学は
「モラトリアム」の期間とされ、社会に出るまでの空
白期間となる場合も少なくない。日本と米国では、こ
のように、大学入学までの事情が違うため、即座に大
学改革をするのも困難なのである。しかし、世界中か
ら留学生を集めるだけの価値と力が米国の大学にはあ
るのである。日本の大学は、それから学ばなければな
らない。問題は、いかにして日本の教育システム全体
を変えながら、大学改革も進めていくかである。

ちなみに、米大学は、出口重視で、質問や討論が授
業の基本、学生は勉強させられ、ドロップアウトも頻
繁。卒業はサバイバルといった厳しい世界に変わる。
さらに、生涯教育はアメリカ高等教育の中で最も巨
大で、急成長のセクターとなりつつあり、教育の大衆
化がうかがえる。

米国の教育現場も、「教師と生徒」、「中央と辺境」
から「相互依存的・相互影響的関係」へと変化しつつ
ある。

米国教育の長所としては自由、自主性、創造性、積
極性、社交性、実用性、勇気、地域奉仕と還元、生徒
の自由、自主性、教室は小社会、生産し、動き回る事

などが挙げられる。教師は、教えると言うより生徒の才能を引き出す。アメリカは、多様社会であり、人種・民族・言語が多様であり、バイリンガル教育や多民族教育は、今やアメリカの教師の必須科目とされている。

副業を抱える教師は多い。黒人・ネイティブアメリカン・ヒスパニック系・アジア系。子供が自分の手で決めていく事を奨励する。社会移動を奨励。独立、自由、個性的表現、移動性、選択、変化、特に恵まれぬ地区においては、学校が社会奉仕という面で重要な役割を果たしている。

しかし、この自由さが、「唯物主義」、「価値観の喪失」、「激しく多様化と複雑化する学校人口に対応できなくなつた」ため、今の問題を引き起こしているとも言える。

短所として挙げられるのは、無秩序、敬意や規律の欠如、道徳や倫理の乱れ、大学以降の極端な高学歴社会、唯物主義、全体性の欠如、人種差別または多様性に対応する事ができない、統一性の欠如、国の中央統制機関が無い、青年犯罪の多発（麻薬、性問題、暴力、子供虐待など）、激しい変化があるのにカリキュラム調整が行われず、成績の標準が決められていない、将来の人生計画に重点があまり置かれていない、中・高等教育では知的成長よりも社会的な発達の方が重視されすぎている、マイノリティーの待遇問題、逆差別問題、マイノリティーの基礎的能力（読み書き、計算）の欠如などである。中等教育において、知的訓練よりも社会的な発達に重点が置かれ過ぎて、基礎的能力も習得できない場合が多い。特に、大学へ進学できない学生は、そういう技能無しに社会へ出ることが多い。これは、米国の生産性や製品の質の低下につながっている。

B. 日本の教育について

日本の教育の長所としては、次のようなことが言える。規律正しさ、純粋性、素直さ、秩序、敬意、礼儀といった面を強調し、具現している。道徳や風紀が乱れてきてはいるものの、いまだに、生徒が払う教師への敬意と礼儀は健在であり、学校教育の秩序維持には貢献している。また、与えられた課題を忠実にこなす能力にも優れている。

しかし、短所は多い。厳格主義、過度の画一化、学校や教師の権限の悪用・誤用・乱用、価値観の崩壊、唯物主義化、家庭の崩壊・家族の交流の欠如、家庭による教育の学校への移行、受験制度、押さえつけ・しめつけによる個性・自主性・積極性の喪失、無感動・無気力・無責任人間を作り出す、自分自身の意見を持たない・持っても発言する機会がない。学校教育に哲

学がない、あっても古く、厳格すぎ、内容がない、生徒の自由を奪う。社会が世俗化し、価値観を失い、唯物主義に流され、教師の訓練もまた僵直化し、内容が必ずしも伴わない資格所得のプロセスに終わってしまふ。学校や専攻の変更などの自由がきかない、いったん社会へ出ると、学校へは戻れないとする、大学受験制度により、大学入学が目的となり、大学の教育は意味がなくなつてつある。初等教育は、そのような大学で教育を受けた教師らにより施されるといった悪循環が存在する。一などが、日本教育に対する典型的な批判である。

学校の環境内では、規律・秩序・厳格が重んじられ、「教師一生徒」という二分の見方が強い。しばしば「意味の無い規則」で生徒が縛られていると言う批判も多い。外国人生徒は増加してはいるが、それでも、日本の学習者は、まだ多様性には乏しい。生徒の家庭との貧富の差はあまりなく、麻薬や極端な暴力や性問題も少ないが、登校拒否者、退学者、いじめなどの行為が多い。校内暴力や犯罪は少ないが、教師から生徒に対する体罰が多い。

C. 解決策

真の教育は、各個人の魂の内部に起きる規律性である。強制するのは、必要なきときが多いが、実際は、まだ個人個人が弱すぎて、仕方なく取る処置である。教育者は、規則を作る、作らないに関わらず、これをふまえて教育にあたらねばならない。

日米双方とも、強点と弱点がある。特に、日本は、米国の自由さ、寛容さ、多様性を受け入れる柔軟性、個性や創造性の重視と言った点を学ぶべきであるが、米国は日本から、礼義、中庸、節度、秩序、規律と言ったものを学ぶことができる。教育のレベルにより、日米の強弱度は、異なるが、初等教育までなら、日本は、確かに、世界的にも通用するものを持っているかも知れない。しかし、文化的・民族的・人種的多様性を受け入れたら、外国語かまたは国際語の教育という意味では、世界に通用する段階からはほど遠い。基礎的な精神的教育（道徳・倫理）では、優秀かも知れないが、いまや相互作用の激しい国際化社会では、日本は、その教育のわくぐみをも、国家的レベルから国際的なそれへと変容させなければならぬのである。

米国の初等教育は、自由、個性、実用性に基づいた、活気に満ちた、小社会を作り上げており、優秀な個人を生み出してきたが、米国は、移民の集合体でもあり、単に、各個人の権利や才能を尊重して自由にやらせることだけでは、追いつけなくなつてしまつた。文化的に多様な国家は、ただできえ、統制が難しい。そこへ

ただ単に自由を与えてしまうと、その社会メンバー達は、自分達の基準だけで物事を処理するようになる。これでは、「国家」の意味はなくなる。故に、米国には、まだ、人種差別の感情が深く根ざしている。

米国の教育改革の鍵は、いかに個人をもっと刺激し、独立させるかと言う日本の課題とは全く異なる。彼らの課題は、この、多様な民族が集まった、巨大で新しい共同体を、いかに、同じ目的と目標の下に統制させるか、である——それも、米国の強みである。「自由」、「個性重視」、「多様性」の精神と実際を不当に奪い取らずに、である。

それには、異なる文化を持つ諸民族を、人間として不変なる性質という基盤において結び付けることしか方法はない。つまり、人間が、一体何者なるか、人間の本質とは何で、何のために人間は生まれ、生活を営むべくされているのかを再度確認し、それに基づいてこの現代の教育を再編成し直すことである。

さらに、日本の教育は、中等・高等あたりから、問題が生じてくる。つまり、受験という枠組みに縛られ、生徒は、実用的に個性的な学習から疎遠させられるのである。「受験制度」は刺激になるかも知れないが、今や、中等高等教育は、受験で成功することに、ほぼその全焦点が置かれている。そのため、受験にかかることが目的となり、本来、人間を教育するという目的の手段のひとつであった受験が、最大の目的とさえ化したのである。

さらに、大学教育は、一度入ってしまったら、出ることは易しい、少なくとも、そう簡単に追い出されることはないと言う「甘えの構造」を生みだし、大学冬の時代表をもたらした。このような大学が、高校・中学・小学校・幼稚園・保育園の教師達を育成しているのである。そしてこれがまた、悪循環を生み出している。そのような大学で教育を受けた教師達がまた、そのような大学へはいることを目的とした教育を施さねばならない。

この悪循環を抜け出すためには、家庭をも含む、全教育者の全レベルでの努力と変革が必要である。全員責任である。しかし、その権限と力からして特に責任を問われるのは、やはり、教育の最高府である大学ではないだろうか？ 正式な教育機関の中では、大学ほど、自由に知識を追求し、新しい考えや知識を提示し、検討できる場所はないはずだからである。それは、大学の教員、研究者らの役割であり、経営者、行政者らの責任である。さらに、その大学を支配しているのは、政府である。

すなわち、大学教育において、先に述べたような、教育改革案を実行に移し始めるべきなのである。それ

により、次世代の児童・青年教育者が育成され、彼らが、そのレベルで、同じ教育を浸透させてゆくのであるから。

日本の教育改革案として挙げられるのは、

- 1) 人間の本質の再確認
- 2) 自由・個性・独創性の重視
- 3) 実用性の重視
- 4) 日本以外の文化への理解
- 5) 日本以外の地域への援助の精神と実践
- 6) 世界を一つとしてみる視野の広さと実行力の養成
- 7) 全体統一と個性重視のバランス

などである。日本では、自由と個性と独創性が育めない。それは、全体性と伝統とときたりに縛られているからであり、これは、結局、人間の本質を忘れ、唯物主義社会に流されているからである。原因は、同じである。

米国は、すでに画期的であるが、これを改革するためには、膨大なる、多様な国家統制のための緻密な研究と調査とその普及が必要である。唯物主義からの脱却である。

また、米国の大学では競争が激しい分、脱落者も多い——大学入学生の50%が退学するという。しかし、同時に、何歳になっても、また戻ってくる事が可能であり、通信教育を始め、生涯学習の枠も広い。逆に、その枠組みが秩序をなくし、統制をなくすという声もある。しかし、万人に教育を、と言う米国の精神は廃れず、その目的は果たされつつはある。平均的アメリカ人の教養レベルは、高い。発言力・行動力は、世界のトップである。しかし、人種差別によりその枠組みからはみ出されている人々の境遇は悲惨であり、米国の悲劇を生む。これが課題である。

日本と米国の教育にはそれぞれ、長所と短所があるが、互いに、非常に対照的である。したがって、お互いが、相手に教え、相手から学ぶ、と言う姿勢が、効力を発するであろう。つまり、日本教育がある程度米国化し、米教育がある程度日本化することで、妥当な方向性を与えることができよう。

E. 本学への提案事項

- 1) 単純な暗記作業よりも、実践的で創造的な作業を増やす。
- 2) 米国型の、短期集中型のスケジュールを採用する。
- 3) 4年制大学編の編入や全般的な教養を目的とした「一般教養コース」を創設する。
- 4) シラバスの改善と徹底化。
- 5) 学生による教員の評価の徹底化。

6) 主要研究誌のための研究だけでなく、学内の問題解決や課題を取り上げた研究の奨励。

7) 地域奉仕、ボランティア、学内の行政や課外活動での業績を評価する。

8) 通信教育などを通して、教員の教育や研修を奨励する。

9) クラスのサイズを調整する。小人教制を奨励する。

10) 課外活動や奉仕活動を奨励し、それらを単位の一部として認定する。

11) 教員には、授業の技術、心理学などを研究し、改善させる。

12) 授業では、質問を歓迎し、奨励する。

13) 学生相談時間と研究・準備時間とをもっと区別させる。

14) 学生には、速読法を学ばさせる。

15) 学生には、レポートや論文の書き方を学ばさせる。

16) 試験をもっときめ細やかに実施させる。

17) 授業の内容や目的を、意志決定・問題解決など実用的な局面にシフトさせる。

18) 規律を強制させるのではなく、自己規制を奨励し、尊重する。

19) 附属幼稚園を授業や実習でさらに活用する。

20) 社会人・大人の学生をもっと入学させる。

21) 地域のための短期大学の特色を強調する。

22) 働きながら科目を取れるよう、工夫する。

23) 地域内の問題解決や奉仕活動を奨励する。

24) 道徳・倫理・哲学などの価値観的・精神的教育を導入する。

25) 個人差や文化的差異を尊重し、歓迎し、奨励する。

26) 4年制大学への移行のプロジェクトを促進する。

27) 時間割を米国型に変更する。

28) 学生を春期だけでなく、秋期にも入学許可する。卒業も同じく、春・秋2回実施する。

29) 留学生受け入れや送り出しを奨励する。

30) 年功序列・終身雇用制度を緩和する。

31) 海外研修をさらに活用する。

32) 学園祭に学術的要素をもっと導入する。

33) 教育の専門家（特に教育学博士）を採用する。現在の教員を教育学において訓練する。

8. 結論

以上、日本と米国の教育には、それぞれ、長所と短所がある。端的に、日本の長所は、礼義、秩序、規律を重んじるため、全体の統制が取りやすく、全体としての生産や活動に大きく貢献する。また、犯罪や風紀の乱れの防衛には貢献している。半面、個人の自主性

自由、荘造堂を育むことができない状態である。

他方、米国は、自由のびのびとした、個性と独立心を養う。獨創性や実用性に優れている。半面、多様な文化・人種・言語を持つ学習者を結びつけることができず、自己主張がはびこり、個人差が激しくなるという傾向がある。

しかし、まだ新しく、多様な人口を有する移民の国としては、米国は、これまでに、素晴らしい業績をあげてきたと言える。形式主義化・厳格化しすぎていく日本は、米国から、大いに学ぶことができる。

また、新しい国である米国は、日本の長い伝統と経験に培われた、そしてその長い歴史を通じて維持されてきた礼義・秩序・規律の価値観も学ぶことはできよう。

いずれにせよ、双方が、非常に対照的であることは明らかであり、お互いが、お互いの長所から学び、短所を矯正することを援助できるような仕組みになっているようにさえ見える。ただし、双方とも、完全な教育ができないことの根底には、人間の本性を見極めた、より深遠な、精神的ビジョンや価値観が欠け、唯物的な教育観に左右されていることが原因となっていることは、共通点のようである。このように、双方の国とも、教育改革の改善は、「人間とは何者か」という、根本的な哲学的問題に答えることから再スタートしなければならぬ。

大学教員として、著者はまず、大学教育そのものの改革に力を注いでみたいと考える。教育者を直接養成するのは、大学だからである。正式な公の学問の場としては、最上学府であり、また、知識追求の場としてもかなりの自由を与えられている大学人が、これを率先して行うことが義務である、と感じるからである。

また、著者が教鞭を取る短期大学の学生らにも、真の教育のあり方について考え、実験し、実践する機会を与えたい。将来教育の場に就職するものも多い学生らには、また、教員に対してただ批判的になるだけでなく、自分だったらどのような教育理念を持ち、どのような授業を計画し、実践するか、考えるという自主性、独立心を養って欲しい、そのきっかけを作り、動機を与え、刺激し、励まして行くのが、彼らの教員の務めである。

今回の研究は、テーマとしては初めての試みであったので、全般的な取扱いとなった。今後の研究としては、各分野をさらに細かく掘り下げていく作業を進めてみたい。特に、毎年行われる海外研修を活用して、ハワイ（その他の国）の初等教育と、短大生が行う教育実習での教育との比較を通し、具体的な比較研究を進めてみたい。また、この比較により、学生自身の教育

育能力の訓練にも結びつけてみたい。

注1: 「Study Abroad」, pp. 2-3 参照。

注2: cf. Johnson, Dupuis, Musila, & Hall, Chapters. 14, 15 & 16.

注3: 喜多村, 「アメリカの教育」参照。

注4: 松尾, 丹野, 「アメリカの教育」。

潮木, 「アメリカの大学」参照。

注5: cf. Bear, Bear's Guide to Earning College Degrees Non-Traditionally & College Degrees by Mail.

注6: cf. 「留学生ジャーナル」, pp. 33-41, The University of Hawaii at Manoa Information.

資料1 「ハワイ大学の風景」参照。

注7: 資料2 「カンサス州立大学『心理学概論』シラパス」参照。

注8: 川上, 「日本に大学らしい大学はあるのか」参照。

注9: cf. Monroe (1977), Knoell & McIntyre (1974) & Heermann (1975)。

注10: これは筆者自身が体験したことであるが、「中の西洋史」という歴史の授業を取ったところ、最初の授業で教授は、インディ・ジョーンズの格好で登場し、自ら“My name is Indiana Jones”と名乗り、クラスを笑わせた。「私は、学生の一部には意地悪で乱暴な先生だという噂がある」と聞いているが、とんでもない！」と怒鳴るなり、講義台を蹴飛ばし、学生らを驚かせた。すると突然、30歳くらいの若い男性〔実際は教授の助手であったが〕が教室に入ってきて、「昨学期はよくも僕にF [不可] をくれましたね、教授」と言うなり、ピストル [おもちゃ] を教授に向けた。教授はすかさず、持っていた自分のピストル [これもおもちゃ] を抜いて発砲し、その学生を“射殺”した。“殺された”学生は数名の男子学生により教室から引きずり出された。このようなエピソードがあった。最近、実際の発砲事件などで深刻な問題を起こしているアメリカだけに、このような冗談が適切かどうかは別としても、アメリカの大学の教授達のジョークは結構徹底しており、授業を盛り上げようと言う意気込みが見いだせると思う。

注11: cf. Parent Book, 資料3参照。

注12: cf. The Children's Centers.

注13: cf. 「留学生ジャーナル」, 「Study Abroad」,

「日本に大学らしい大学はあるのか」, 「アメリカの教育」(喜多村), 「大学を問う」, 「大学教授になる方法」, 「アメリカ留学事典」。

注14: cf. 「日本の小学生」, 「教育学を学ぶ」, 「日本に大学らしい大学はあるのか」, 「大学を問う」。

参 考 文 献

- 「アメリカ留学事典'93」アルク編。東京: アルク, 1992年。
- Bear, John. Bear's Guide to Earning College Degrees Non-Traditionally. Benicia, CA: C & B Publishing, 1993.
- . College Degrees by Mail. Berkeley: Ten Speed Press, 1993.
- The Children's Centers at Honolulu, Kapiolani and Leeward Community Colleges: A Program of Honolulu Community College. Honolulu Community College, Honolulu, HI, 1993.
- 「大学院留学事典」アルク編。東京: アルク, 1989。
- デューイ. 「学校と社会」. 宮原 誠一訳. 東京: 岩波書店, 1980.
- Heermann, B. Cooperative Education in Community Colleges. San Francisco: Jossey-Bass Publishers, 1975.
- Johnson, J. A., Dupuis, V. L., Musial, D., & Hall, G. E. Introduction to the Foundations of American Education. 9th edn. Boston: Allyn and Bacon, 1993.
- 川上 正光. 「日本に大学らしい大学はあるのか」. 東京: 共立出版, 1991.
- 喜多村 和之 編. 「アメリカの教育: 『万人のための教育』の夢」. 東京: 弘文堂, 1992.
- Knoell, D. & McIntyre, C. Planning Colleges for the Community. San Francisco: Jossey-Bass Publishers, 1974.
- 松尾 武之, 丹野 真. 「アメリカ研究」, 『第7章: アメリカの教育』. 東京: 大修館, 1991年。
- Monroe, C. R. Profile of the Community College. San Francisco: Jossey-Bass Publishers, 1977.
- 大津和子. 「国際理解教育」. 東京: 国土社, 1994年。
- Parent Handbook. Kanoelani Elementary School. Waipahu, HI, 1993.

「留学ジャーナル：AUTUMN1994年」国際文化教育センター編。東京：ICS国際文化教育センター、1993。

宋陽子編。「アメリカ高校留学ガイド」。

東京：JTB日本交通公社出版事業局、1992。

「大学を問う」産経新聞社社会部編。

東京：新潮社、1992。

千石保、飯長喜一郎。「日本の小学生：国際比較でみる」。東京：日本放送出版協会、1970。

柴田義松、竹内常一、為本六花治。「教育学を学ぶ」。東京：有斐閣、1987。

潮木守一。「アメリカの大学」。東京：講談社、1993。

「Study Abroad：海外留学オールドガイド：'93.6～'94.5」アイエスエイ編。東京：ISA留学センター、1993。

高橋進。「基礎からよくわかる倫理」。東京：旺文社、1983。

鶴見俊輔。「アメリカ哲学」。東京：講談社学術文庫、1992。

University of Hawaii at Manoa: 1991-93 General and Graduate Information Catalog. University of Hawaii. Honolulu: University of Hawaii Press, 1991.

鷺田小彌太。「大学教授になる方法」。東京：晋弓社、1992。

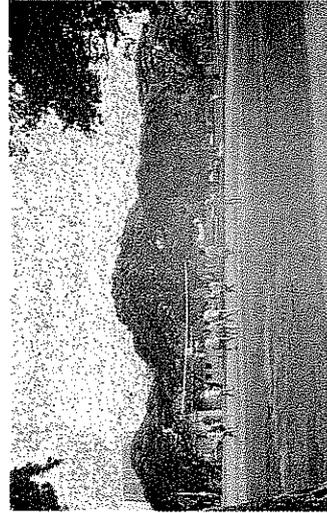
資料1 ハワイ州立大学の風景



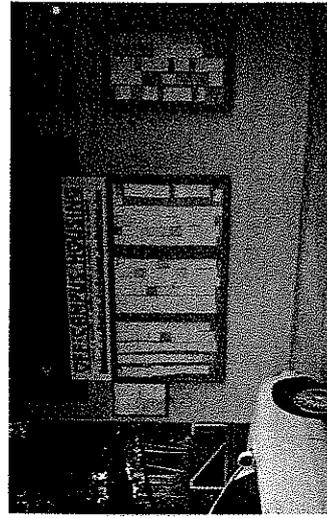
2-1 キャンパスセンター



2-2 講義棟



2-3 野外活動



2-4 アパート、下宿などの情報掲示板



2-5 キャンパスセンターに見られるポリネシア文化を保存するための壁画

2-6 野外活動

資料 2 カンサス州立大学「心理学概論」シラバス 1985年9月

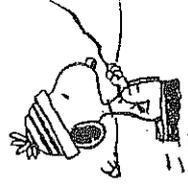
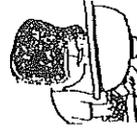
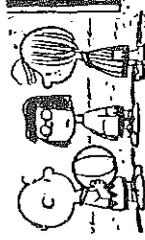
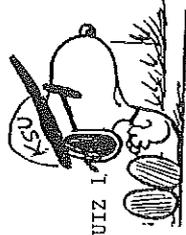
General Psychology Course Syllabus (Psy 110, #22350) MWF 8:30 CW 101 Fall 1985

Instructor: Dr. (担当教官名) , Room BH 421, Phone: 532-6850 (研究室、電話番号)

Apprentices: (Office BH 427)
(助手名)

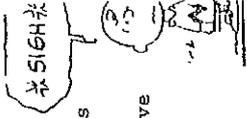
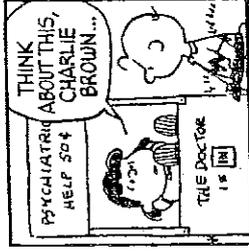
Text: R. R. Bootzin, E. F. Loftus, & R. B. Zajonc. Psychology Today: An Introduction.
(テキスト) (5th Ed.) New York: Random House, 1983.

Date (日)	Assigned Reading Pages (読んでくる箇所)	Topic (主題)
W 8/28	1-25	Introduction to Psychology
F 8/30	25-29, 34-44 (29-34 optional)	Methodology, Ethical Issues
W 9/4	45-67	Brain and Nervous System
F 9/6	67-80	Brain Issues, Sensation
M 9/9	80-101	Sensory Systems
W 9/11	103-125	Perception
F 9/13	127-129, 139-152, QUIZ 1	Consciousness, Biofeedback, Drugs, ESI
M 9/16	130-139	Sleep, Dreams
W 9/18	EXAM 1 (pp. 1-152)	
F 9/20	153-175	Issues in Learning, Nature vs. Nurture
M 9/23	177-197	Classical and Operant Conditioning
W 9/25	199-212	Memory
F 9/27	212-225, RP #1 due	Memory
M 9/30	227-237	Problem Solving
W 10/2	238-248	Decision Making, Creativity
F 10/4	249-269	Development of Young Children
M 10/7	271-293	Cognitive Development
W 10/9	295-308	Language
F 10/11	308-319, QUIZ 2	Language Development
M 10/14	EXAM 2 (pp. 153-319)	Personality Development
W 10/16	321-337	Adolescent Development, Emotion
F 10/18	337-352	Emotion
M 10/21	352-365	Motivation
W 10/23	367-387	Human Sexuality
F 10/25	389-408	Freudian Theory
M 10/28	411-419	Personality Theories
W 10/30	419-438	Personality
F 11/1	438-453, RP #2 due	Intelligence and IQ
M 11/4	455-469	Personality Testing
W 11/6	469-478	Stress
F 11/8	479-493, QUIZ 3	



米国の教育制度：日本との比較論

M 11/11	493-502	Coping with Stress
W 11/13	EXAM 3 (pp. 321-503)	
F 11/15	505-516	Psychological Disorders
M 11/18	516-525	Psychological Disorders (cont'd.)
W 11/20	527-543	Theories of Abnormality
F 11/22	545-559	Psychotherapy
M 11/25	559-566	Psychotherapy (cont'd.)
M 12/2	567-585	<u>Attitudes, Persuasion</u>
W 12/4	587-598	Perception of Self and Others
F 12/6	598-607, Last day for extra credit RPs	
M 12/9	609-621	Interpersonal Attraction, Love
W 12/11	621-633	Conformity, Aggression
F 12/13	635-653, QUIZ 4	*Helping and Cooperation
TH 12/19	11:50 a.m. CW 101	Environmental Psychology
		FINAL EXAM



(授業日)

Class Meetings: Every Monday and Wednesday the class will meet as a large lecture in CW 101. Every Friday you will meet in a small class led by a teaching apprentice (rooms to be assigned in class 8/28).

(試験法)

Grading: Course grade will be figured based on the total number of points you receive on four tests, four quizzes, two reaction papers, and journal. Tests will be 50-point multiple-choice and cover material from MW lectures and all assigned reading. Quizzes will be 10 points each and be made by each individual apprentice. If for some reason you cannot take a test at the assigned time, you must contact me ahead of time to make arrangements (see apprentice for quizzes). Test questions will include interpretation and application, as well as straight memory for facts. Old tests are on file in the Reserve Department at the library.

(小レポート)

Reaction papers: You are required to read any two articles from a list of articles on Reserve. After reading, write a 1-2 page reaction to the article, e.g., what you gained from reading it, how you agree/disagree with the author, how what they said fits in with your experience, etc. This is not to be a summary of the article and must not be copied from the article. Papers are worth five points each. Turn in to your apprentice on or before September 27 (#1) and November 1 (#2).

(研究レポート)

Research requirement: To help you get a little feel firsthand for research in psychology and to allow the Psychology Department to carry out its ongoing research, all General Psychology students are required to 1) participate as experimental subjects in 2 hours of research, OR 2) do 2 extra reaction papers beyond the two required of everyone.

(日記)

Journal: One of the goals of this course is to help you understand yourself and others better. A good way to do this is to keep observations on your own behavior, reactions, and thoughts that seem interesting in some way. In a separate notebook or folder, keep dated entries throughout the semester. Write anything you want in them during the semester, especially including observations and insights of yourself and relationships of your own experience to course materials. Journals are a credit/no credit assignment (1 point/week 15 pts. total). Your apprentice will announce due dates.

(追加ポイント)

Extra Credit: You may earn up to 6 bonus points, to be added to your final semester score after the curve is figured. These may be earned by any combination of extra experiments (2 points/hr.) and/or reaction papers (2 points/paper). Turn in such papers by Dec. 6.

Below are listed a large number of articles in popular magazines including Psychology Today (PT) and Scientific American (SA). As an alternative to experimental participation, you may choose any two of the articles listed, read them, and write a 300-500 word reaction to each article, including, e.g., how it relates to your experience, what you thought of it, and/or why you think the author is right or wrong. Each paper (assuming it shows any amount of thought at all) will be equivalent to one hour of experimental participation. If your class has assigned reaction papers, those articles are also to be selected from this list. All articles below are on reserve in Farrell Library.

CAUTION: PAPERS ARE NOT TO BE COPIED FROM THE ARTICLE; PLAGIARIZED PAPERS MAY RESULT IN LOSS OF CREDIT FOR THE COURSE.

ANIMAL BEHAVIOR

1. Wilson, E. O. Animal communication. SA 9/72
 2. Pryor, K. The rhino likes violets (operant condition of zoo animals) PT 4/81
 3. Premack, A. J., & Premack, D. Teaching language to an ape. SA 10/72
 4. Fleming, J. D. The state of the apes (teaching chimpanzees to talk in sign language). PT 1/74
 5. Temerlin, M. My (chimpanzee) daughter Lucy. PT 11/75
 6. Tortora, D. Curing peevish pets (psychotherapy for pets) PT 5/78
 7. Patterson, F. Conversations with a gorilla (in sign language). National Geographic. Oct. 1978 (This article is not on reserve due to all the photos which do not Xerox well.)
- PERCEPTION
3. Haber, R. N. Eidetic images are not just imagining. PT 11/80
 9. Teuber, M. L. Sources of ambiguity in the prints of M. C. Escher. (figure-ground ambiguities). SA 7/74
 10. Marks, L. E. Synesthesia. PT 6/75
 11. Milgram, S. The image-freezing machine (Psychology of Photography) PT 1/77
 12. Douglas, M. Accounting for taste PT 7/79

INTELLIGENCE

13. Baltes, P. B., & Schaie, K. W. Aging and IQ: The myth of twilight years. PT 3/74
14. Koch, R., & Koch, J. We can do more to prevent the tragedy of retarded children. PT 12/76
15. Lewin, R. Starved brains (malnutrition and intelligence) PT 9/75
15. Zajonc, R. B. Birth order and intelligence. PT 1/75

COGNITIVE PSYCHOLOGY

17. Bahrick, H. P., et al. Long-term memory: Remembering high-school days. PT 12/74
18. Bower, G. H. How to remember. PT 10/73
19. Slobin, D. I. Learning language by children in different cultures. PT 7/72
20. La Brecque, M. On making sounder judgments. PT 6/80
21. Bellugi, U. How children learn the rules of language. PT 12/70
22. Fischhoff, B. Kidding yourself: The silly certainty of hindsight. PT 4/75
23. Bever, G. H. Wood & Memory PT 6/81
24. Cole, R. A. Navigating the slippery stream of speech perception. PT 4/79

(以下、参考文献・記事・エッセイのリストが30件以上続く)

資料3 カノエラニ小学校の風景



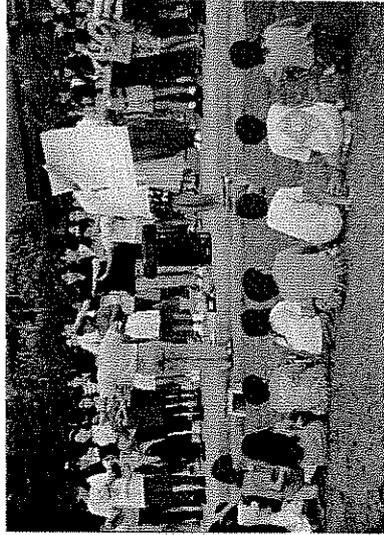
3-1 教室内「教室は小社会である」



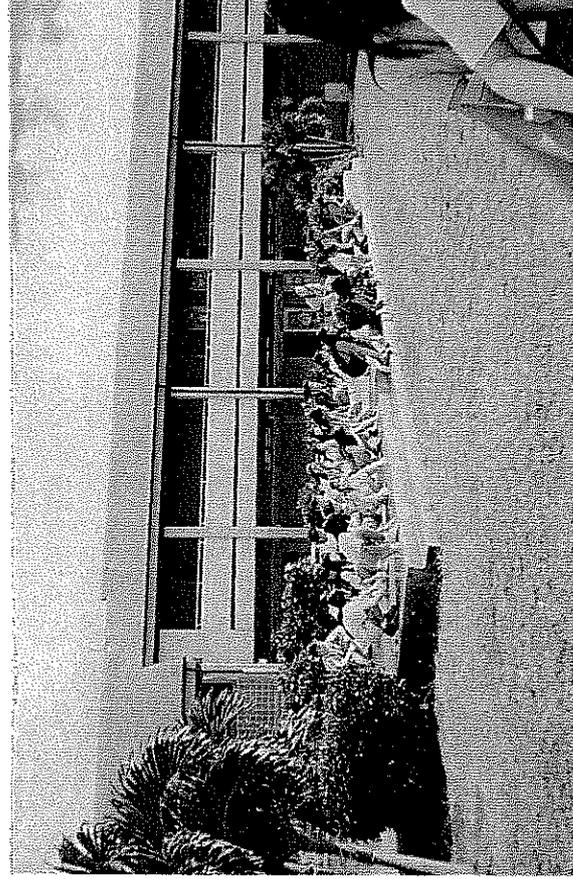
3-2 教室内



3-3 屋外活動「身体をよく動かして学ぶ」



3-4 屋外活動（本学短大生と交流 ダンス）



3-5 屋外活動（ダンス）